

一〇にして合計一萬三千七百三十八を數ふ。其一面に自然消滅者あることは茲に言を要せざるべし。而して増加合計一萬三千中の六割までが、大阪聯合會を中心とせることは亦明かなる理數にして、争議發生までの神戸聯合會は、年來の會員一千五百の壘を超過すること一千ならざるものありき。神戸聯合會の約二千に對して争議團は之に十數倍するのみか、全國に於ける友愛會員の數を遙に凌ぐものあり。

而も一面に於て、神戸友愛會が殊に川崎及三菱に於ては同市の他會社に比しても尙少數——全工場員に對比して言ふに足らざる——の會員を有するに過ぎざりしこと既記の如くなる時、何故に三萬の労働者が而も極めて自然に其統制を受くるに到りたるやの問題は又若干の興味なしとせざるべし。

茲に先づ明にすべきは世上、經營者に阿附するの徒は、友愛會と争議の關係に就て

一、友愛會は争議の賣込をなす

二、争議中の工場労働者が入會するに當りては三、四ヶ月分位の會費を前納せしむ

等の説を爲すものあり。素より津々浦々まで一様に律し難からんも、大体に於て兩説とも虚構の中傷説にして取るに足らず。たゞ各地より争議應援のための本部員の特派を求むる時には、旅費と滞在中の食費を求援者に負擔せしむる規定なるも、是すら争議團の狀況如何に依りては行はれず、又應援者を派遣する場合が相互的立場に於て支出するの立場にあり。

神戸争議の頭初に當り神戸友愛會最高幹部の懷抱せる觀念は徹底的對抗を豫期するに非ざりしことは屢繰返せるが如し。たゞ大阪に於ける各争議の後を享け、大阪の經營者を通じて神戸の經營者に與へたる脅威の餘燼を有効に利用すべく、大阪の經營者が容認したる工場委員制度を提げ、労働組合主義的組合の本質的主張たる団体交渉權を號嘯したるに過ぎざるものありき。然るに一般の労働者は、労働者が共通に有する焦燥なる氣分を大阪に刺戟されて發揮されたる友愛會の驚異に値する熱烈なる集中戦略の成效に表せる意識的なる、或は無意識的なる信頼を神戸聯合會の上に注げるなり。「友愛會」の名に對しては各地労働者中何となく虫の好かざる思ひをなせるもの多きは世の知るところなるも、神戸に於ては最近著しく其反感薄らげる矢先、而も今回の争議に於て神戸友愛會が何等組合擴張的意志を見せず、結合確認の運動も労働組合聯合團の名に於て之を行ひ、争議團を合併するも「労働争議團」と命名する程度に於て淡泊なりしに對しては最初より川崎、三菱の各部ともに心おきなく是に倚據し得たるは勿論なるべし。

「どうでもやらなければならぬらしいのですがどうでせう」と云ふ程度の相談より「労働争議團」が全権委員に友愛會幹部を選ぶまで其間何等の不自然なく、所謂情勢的に進行せり。又若し是に關し別途の觀察をなすべくんば、三菱、川崎兩大會社の労働者が競ひ立ちしたため外に所謂、勞資の局面を重大ならしめし結果、後より立てるものは、最初に立ちし電正會、兵庫工場鑄鋼科、三菱内燃機が友